

令和 5 年 6 月 7 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K02884

研究課題名（和文）英国大学評価における＜学生エンゲージメント＞の実証的研究

研究課題名（英文）An Empirical Study of the word "Student Engagement" in UK University Evaluation Documents

研究代表者

堀井 祐介 (Horii, Yusuke)

金沢大学・数理・データサイエンス・AI教育センター・教授

研究者番号：30304041

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,200,000円

研究成果の概要（和文）：英国TEF評価根拠資料となる各高等教育機関報告書を対象として語彙の頻度、共起状況についての分析を行った。その結果、"student engagement"が複合語スコアで5位と上位に位置し、さらに、"student engagement"との共起関係では"learning", "commitment", "enhancement", "approach", "activity", "experience"といったものが上位に来ていることが明らかになった。また"we"も上位に来ており大学自身が"student engagement"に取り組む姿勢もうかがえた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究によって、ドキュメントレベルではあるが、"student engagement"が重視されていることが明らかになるとともに、英国高等教育機関が自ら努力して"student engagement"の向上・充実を目指していることが垣間見えた。このことは、今後"student engagement"（学生参画・学生エンゲージメント）を機関の内部質保証、認証評価活動に取り入れることを計画している日本の高等教育政策の方向性を決める際のよきガイドとなり得ると考えられる。また高等教育機関における評価文書に対するテキストマイニングの手法の有効性を一部なりとも示せた点は学術的意義があるものと考えられる。

研究成果の概要（英文）：We analyzed the frequency and co-occurrence of vocabularies in the reports of each institution of higher education, which serves as the base material for TEF evaluation in the UK. As a result, it was also revealed that "student engagement" was ranked 5th after student experience, academic staff, student feedback, and academic support when looking at compound word scores. It became clear that "learning", "commitment", "enhancement", "approach", "activity", and "experience" came to the top in the co-occurrence relationship with "student engagement". In addition, the pronoun "we" is also ranked high, indicating that the university is working on student engagement.

研究分野：大学評価

キーワード：学生エンゲージメント student engagement テキストマイニング TEF QAA 質保証

## 1. 研究開始当初の背景

近年、高等教育において、**<アウトカム(学習成果)>と並んで<学生エンゲージメント(学生の学びへの主体的関与)>についての議論**が活発になされている。

<学生エンゲージメント(student engagement)>には、学生が何をどのように体験したのか(student experience)、大学の各種活動への学生の関与(student involvement)、学生満足度(student satisfaction)などの側面も含まれている。そのため、学生自身による主体的学びや成長の実感に加えて、学生自身が、学生と教員、学生同士、学生と高等教育機関(全般的な学習環境および学生支援制度を含む)学生と社会の関わりをどのように意識しているかが<学生エンゲージメント>を考える上では重要である。

<学生エンゲージメント>把握を目的として、米国での The National Survey of Student Engagement (NSSE)、英国での The National Student Survey (NSS)、オーストラリアでの The Student Experience Survey (SES)などで国レベルでの学生アンケートが実施され、社会的に大きな役割を果たしており、”A study of the use of the National Student Survey to enhance the Student Experience in Education Departments”(Szerenke Kovacs et al., 2010)など、これらのデータに基づく研究も盛んに行われている。

加えて、**<学生エンゲージメント>は、高等教育機関における教育体制、学生・学習支援体制、施設・設備を見直すには非常に有効な概念**とされており、特に英国では、各高等教育機関が機関独自の調査とこれら国レベルのアンケート結果を合わせて分析し現場での教育実践・改善に役立てようと努力している。

英国では、ここ数年、Higher Education and Research Act 2017による大学評価システムの大改革が進行中であり、これまで大学評価業務の一部を担当し、その結果を資源配分に反映させていた「イングランド高等教育財政カウンスル(Higher Education Funding Council for England, HEFCE)」が2018年3月末で閉鎖され、その機能の多くが「学生局(Office for Students, OfS)」に移管されることとなった。このOfSは、HEFCE及び「高等教育機会均等局(Office for Fair Access, OFFA)」を前身とする政府外公共機関で、主にイングランド地方で高等教育の質保証や規制等を行っている。OfSは、2018年からは新しく学位授与機関(DAPs)登録制度を稼働させており、今後、このOfSは、これまで英国における評価・質保証業務を担ってきた「高等教育質保証機構(Quality Assurance Agency for Higher Education, QAA)」と連携し大学評価の中心プレイヤーとなる。OfSはまた、「**教育卓越性および学生の学習成果枠組み(Teaching Excellence and Student Outcomes Framework (TEF))**」制度の運用も開始しており、その評価結果もOfSのWebサイトで公開されている。TEFでは、各高等教育機関が、OfSおよび評価チームに対して教育活動の根拠資料としての自己点検・評価報告書を提示することが求められているが、そこには必ず<学生エンゲージメント>の項目が入っており評価指標として位置づけられている。

日本でも2004年の認証評価義務化以降、各高等教育機関における大学評価への意識は高まってきた。2018年度からの認証評価第3サイクルにおいては内部質保証がより一層重視されるようになり、自己点検・評価報告書の実質化がさらに進むものと考えられる。そのため、教育評価を含む大学評価における主要プレイヤーである**学生に関する<学生エンゲージメント>をどのように把握し、教育改善につなげるのかは高等教育機関の内部質保証にとって非常に重要な要素**となっている。しかし、英国での教育評価、大学評価活動において、<学生エンゲージメント>が重要な項目と位置づけられ、全国レベルのアンケート結果および高等教育機関独自の機関内調査結果などの客観的データに基づく<学生エンゲージメント>自己評価がなされているのに比べると、日本の機関別認証評価基準および結果を見る限り、日本において<学生エンゲージメント>を十分把握し、その重要性を十分理解されているとは言いがたい。

<学生エンゲージメント>研究に関しては、我が国でも、学生の主体的学習行動分析、学生アンケート結果分析や教育改善との関係などの研究は盛んに行われている。しかし、**<学生エンゲージメント>が教育評価を含む大学評価においてどのように位置づけられ、その抱えている課題について、高等教育機関自身がどのように捉え、それらをどのように教育改善に結びつけているかの全体像は未だ明らかにされていない。**

そこで、本研究では、教育評価を含む大学評価根拠資料である高等教育機関による自己点検・評価報告書および評価機関による評価結果報告書等を分析することで、**どのようにすれば<学生エンゲージメント>を大学評価において本質的に有効な概念として位置づけられるのか、**という「問い」を立てる。本研究は、教育評価を含む大学評価における主要プレイヤーである学生に関する<学生エンゲージメント>の位置づけをより明確にし、その評価指標を提示することは日本の高等教育の発展に大いに資するものである。

## 2. 研究の目的

今後の日本の高等教育評価政策に資するため、英国での教育評価を含む大学評価に関する自己点検・評価報告書等を分析対象とし、テキストマイニングの手法を用いて、英国での大学評価における<学生エンゲージメント>の位置づけを明らかにし、日本の大学評価における<学生



|    |             |      |               |             |
|----|-------------|------|---------------|-------------|
| 3  | commitment  | Noun | 1293 (0.011)  | 104 (0.051) |
| 4  | enhance     | Verb | 1951 (0.017)  | 124 (0.060) |
| 5  | activity    | Noun | 2502 (0.022)  | 141 (0.069) |
| 6  | learn       | Verb | 5363 (0.047)  | 225 (0.110) |
| 7  | experience  | Noun | 4654 (0.040)  | 201 (0.098) |
| 8  | approach    | Noun | 2401 (0.021)  | 129 (0.063) |
| 9  | we          | PRP  | 20418 (0.177) | 651 (0.317) |
| 10 | enhancement | Noun | 1038 (0.009)  | 88 (0.043)  |

“learn”, “learning”といった学びに関するもの、“commitment”, “enhance”, “enhancement”, “approach”といった関与、発展に関するもの、また“activity”, “experience”といった学生自身の活動に関するものが上位に来ていることがわかる。“level”に関しては、直接前後に student engagement がつながる 82 例中 38 例が“high level of “となっており高いレベルでの学生参画への言及がなされていることがわかる。代名詞である“we”も上位に来ていることから、大学として主体的に student engagement に取り組む姿勢もうかがえる。

また“engagement”以外のキーワードとして“involvement”, “experience”, “satisfaction”の共起関係についても簡単に見てみる。

2. “involvement”は 363 回登場し、うち 61 例が“student involvement”であった。

“student involvement”と他の用語との共起関係を見ると表 2 のようになる。

表 2

| 順位 | 語            | 品詞         | 語の登場回数       | 登場しているうちの student involvement との共起回数(率) |
|----|--------------|------------|--------------|---|
| 1  | Exposure     | Noun       | 128 (0.001)  | 36 (0.146)                              |
| 2  | forefront    | Noun       | 156 (0.001)  | 26 (0.105)                              |
| 3  | enrich       | Verb       | 231 (0.002)  | 30 (0.121)                              |
| 4  | LE2          | ProperNoun | 151 (0.001)  | 16 (0.065)                              |
| 5  | scholarship  | Noun       | 695 (0.006)  | 35 (0.142)                              |
| 6  | PRACTICE     | ProperNoun | 468 (0.004)  | 15 (0.061)                              |
| 7  | RESEARCH     | ProperNoun | 650 (0.006)  | 16 (0.065)                              |
| 8  | environment  | Noun       | 1732 (0.015) | 33 (0.134)                              |
| 9  | PROFESSIONAL | ProperNoun | 777 (0.007)  | 16 (0.065)                              |
| 10 | extent       | Noun       | 137 (0.001)  | 6 (0.024)                               |

固有名詞との共起が多い点が目立つほか、“scholarship”, “environment”など学習環境関連の用語が上位に来ている。

3. “experience”は 4,887 回登場し、うち 1,201 例が“student experience”であった。

“student experience”と他の用語との共起関係を見ると表 3 のようになる。

表 3

| 順位 | 語       | 品詞   | 語の登場回数        | 登場しているうちの student experience との共起回数(率) |
|----|---------|------|---------------|--|
| 1  | enhance | Verb | 1951 (0.017)  | 399 (0.106)                            |
| 2  | learn   | Verb | 5363 (0.047)  | 631 (0.168)                            |
| 3  | they    | PRP  | 13537 (0.117) | 1165 (0.310)                           |

|    |          |      |               |              |
|----|----------|------|---------------|--------------|
| 4  | learning | Noun | 4712 (0.041)  | 491 (0.131)  |
| 5  | provide  | Verb | 6519 (0.057)  | 543 (0.145)  |
| 6  | work     | Noun | 4020 (0.035)  | 398 (0.106)  |
| 7  | we       | PRP  | 20418 (0.177) | 1221 (0.325) |
| 8  | that     | W    | 4018 (0.035)  | 368 (0.098)  |
| 9  | academic | Adj  | 5892 (0.051)  | 449 (0.120)  |
| 10 | ensure   | Verb | 3428 (0.030)  | 327 (0.087)  |

こちらに関しても”learn”, ”learning”といった学びに関するものが上位にある。主語の代名詞としての”we”だけでなく、活動主体である学生自身を指す”they”も上位に来ている点が”engagement”と異なるほか、大学側が”provide”（提供）するだけでなく、学生が”work”（活動）するという点が”experience”の特徴でもある。

4. ”satisfaction”は 1,548 回登場し、うち 550 例が”student satisfaction”であった。  
”student satisfaction”と他の用語との共起関係を見ると表 4 のようになる。

表 4

| 順位 | 語        | 品詞         | 語の登場回数       | 登場しているうちの student satisfaction との共起回数（率） |
|----|----------|------------|--------------|--|
| 1  | NSS      | ProperNoun | 2345 (0.020) | 301 (0.311)                              |
| 2  | overall  | Adj        | 1021 (0.009) | 138 (0.143)                              |
| 3  | high     | Adj        | 2473 (0.021) | 204 (0.211)                              |
| 4  | survey   | Noun       | 1576 (0.014) | 118 (0.122)                              |
| 5  | score    | Noun       | 929 (0.008)  | 76 (0.079)                               |
| 6  | average  | Noun       | 1144 (0.010) | 84 (0.087)                               |
| 7  | level    | Noun       | 4040 (0.035) | 198 (0.205)                              |
| 8  | rise     | Verb       | 337 (0.003)  | 51 (0.053)                               |
| 9  | question | Noun       | 835 (0.007)  | 66 (0.068)                               |
| 10 | SURVEY   | ProperNoun | 333 (0.003)  | 46 (0.048)                               |

NSS は全国レベルでの学生調査の略称であり、満足度”satisfaction”も調査項目の一つである。また、NSS 以外の”survey”に加えて ”score”, ”average”, ”level”, ”high”といった用語が上位に来ており、大学側が数値結果を非常に気にしていることがうかがえる。

これらの分析結果から、英国 TEF 報告書においては”student engagement”は一定程度認識され、学び、学生自身の活動、大学としての発展への関与があることがわかった。発展への言及があるということは大学としてまだまだ不十分である点も認識している結果であると考えられるため、今後も英国の大学での”student engagement”は進んでいく可能性があるものと思われる。また関連して調査した”involvement”, ”experience”, ”satisfaction”についてもそれぞれ興味深い結果が出ており、テキストマイニングの手法による TEF 報告書の分析が新たな研究手法となり得ることがわかった。今後、今回集めたテキストをもとに、継続的に”student engagement”等のキーワードを基にした共起関係分析を進めていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>堀井 祐介                                |
| 2. 発表標題<br>「教育プログラム評価の国内外の動向（現状と課題）」            |
| 3. 学会等名<br>大学基準協会第2回大学評価研究所「公開研究会」（工学院大学）（招待講演） |
| 4. 発表年<br>2019年                                 |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|